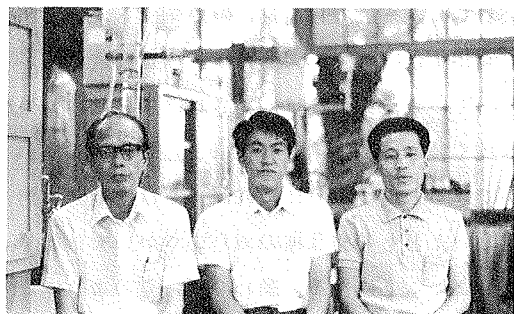




除草剤研究室のメンバー

農林省林業試験場 除草剤研究室

真 部 辰 夫

正門近く、木造の粗末な一隅に店開きしたのは、昭和41年7月なので満3才の研究室である。所属は、造林部になっている。

現在の研究員は真部辰夫（42.4～）、大場貞男（44.4～）、浅沼晟吾（42.4～）、石井邦作（赤沼試験地本務）の総員4名である。

実質的には、42年度から真部、荒木武夫（41.8～44.4）、浅沼が研究室作りをはじめたが、真部、荒木は多少除草剤を手がけたというものの子供の遊び程度であり、浅沼は経験なしで、全くのインスタントチームが仕事を始めたわけである。また、新設であるため、実験室は空っぽで、何ごともしずばりしすぎて、世間しらずの心強さでのびのびとやってきた。研究員の専門化と実験室の整備を心掛けてきたので、まがりなりにも研究らしい仕事ができるようになり、設備もだんだんとのってきたことをうれしく思っている。宇都宮大学竹松先生、加藤造林部長のご指導の賜で、感謝の言葉もない。

研究室設立にあたっては、各方面のご援助があったときいているが、皆さんにお返りする道は研究成果をあげる以外にないと思っている。

林業に除草剤が意欲的に導入されるようになったのはつい最近のことであるが、当初に比べ

大きな変化は、省力の補助的な手段から、除草剤使用を前提にした作業仕組を行なう考え方に変わってきたことであろう。このため、研究室としてもいろいろ要望されることが多く、責任も重くなっている。

現在行なっている仕事を大別すると

- ① 環境因子と除草効果（林地を対象とする）
- ② 環境に対する影響（ " ）
- ③ 雑草木の生理生態（ " ）
- ④ 除草剤の残留、移動（ " ）
- ⑤ 苗畑における除草剤の導入

になる。

室員だけで幅広く研究を行なうには手不足なので、苗畑、現地試験は赤沼試験地に全面的な協力をえている。また、一部は各支場、営林局と分担しているものもある。

①については植生別にスクリーニング、散布時期、散布量などについて検討が進められてきたが、最も事業化が進んでいるササについては効果むら（環境の違いにより除草効果にむらが生ずる）の解明を急いでいる。

次に除草効果の判定は、除草剤を使用した場合、どうしても人手刈りよりも仕上がりが粗末になるため、その評価がまちまちであったが、研究上最も必要な現地の光測定を同時に多数点

行なえるアントラセン法を開発できたので、この問題も正確なデーターを基礎に論議されるものと思っている。

②については44年度から特別研究「森林生態系におよぼす影響とその調査方法」に着手しているが、このテーマの一部としてミヤコザサ枯殺後の植生変化と、④の残留移動を分担している。

林業はさきへのべたように本格的な除草剤の導入が最近のことであるし、苗畑は別として農業とは異なった除草剤が使用されていること、実用化試験に重点をおいてきたことなどから、基礎資料の不足が目立つ。これから着実な発展を期待するにはどうしても基礎研究の充実を急がねばならないと思っている。このため③、④

は基礎研究に重点をおいている。

⑤については過去における実績もあるため、赤沼試験地と共同で基礎よりも実用化試験を主体に行なっている。43年度はトリフルラリンの導入試験を行ない好成績をえている。

2か年一緒に苦勞してもらった荒木氏は本年4月古巣の営林局にかえり、かわって東北支場より大場君を迎えた。荒木氏は営林局でも除草剤を担当し相変らずのはりきりようである。2か年の経験を大いに現場に生かしてほしいと思っている。

まだヨチヨチ歩きの研究室であるが、研究員一同大方のご指導とご援助をえて、少しでも役に立つ研究をするよう必掛けたいと思っている。

(筆者は 除草剤研究室長)

昭和43年度冬作, 44年度夏作芝生関係 除草剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

昭和43年度冬作, 44年度夏作芝生関係除草剤の試験成績検討会は、去る10月17日、東京(新日本会館)において開催された。会議は、当協会河田会長の司会により、試験担当者の概要報告と実用化判定審査の順で行なわれた。

また、展示圃関係もあわせて検討された。

ここに、その結果の概要を紹介する。

(1) 供試除草剤

昭和43年度冬作, 44年度夏作芝生関係除

草剤の供試薬剤は<表1>の通り6薬剤であったが、このうち4薬剤は新薬剤(※印)である。

(2) 試験結果の概要

次に、試験結果の概要を、判定規準によってみると<表2>の通りで、実用化に移されたものは1薬剤である。

実用化薬剤の使用基準は、<表3>の通りである。